

主題	暮らし慣れた家で最愛の家族と
副題	～ 100歳 我が家に帰る ～
外泊・外出支援	

研究期間	4ヶ月	事業所	介護老人福祉施設・けんちの里
発表者：小松 和晴		アドバイザー：渡辺 恵子	
共同研究者：菊地 都夢、田中 潤一			

電話	042-472-0657	メール	takasaki@kenchi-sato.or.jp
FAX	042-475-5596	URL	http://www.kenchi-sato.or.jp/

今回発表の事業所やサービスの紹介	平成元年、東久留米市で最初にできた特養です。特養100名、ショートステイ6名の合計106名が利用されています。「けんち」とは、仏典に見知（けんち）又は知見（ちけん）という言葉があり、悟りを意味します。「けん」を健康の健に、「ち」を知識・知恵の知にかけて、健康で知識豊かに人生の悟りを開いたお年寄りの集う里という意味を込めて「けんちの里」と命名されました。
------------------	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

《1. 研究前の状況と課題》

☆状況

けんちの里では、毎年10名程の方の看取り介護を行っており、ここで暮らせてよかったと感じてもらえるよう支援してきました。

しかし、看取り介護の段階では、私たちにできることは限られており、元気なうちに、もっとお客様の思いをくみ取ることはできなかったのだろうかと感じていました。

☆課題

どんな老後を過ごしたいかと考えたとき、暮らし慣れた家で最愛のご家族と過ごせたら、高齢になり介護が必要になっても、特養に入所となっても、その思いはあきらめないでほしいと考えます。

暮らし慣れた家で過ごすことが実現できるよう、どのようなサポートができるかが課題でした。

《2. 研究の目標と期待する成果・目的》

☆目標

お客様の状況に応じた個別サポートを提供し、ご家族とひと時を過ごすことによって、お客様・ご家族が共に心が潤むことができ、日々の生きる力に結び付ける

☆期待する成果・目標

○お客様

「家に帰りたい」との思いを帰宅願望という周辺症状と捉えるのではなく、自然な思い、本人の意向として考え、対応することでQOLの向上につなげる。

○ご家族

様々な理由により特養への入所を選んだとしても、お客様を施設と共に支援していることを感じてもらう。

《3. 具体的な取り組みの内容》

100歳と99歳のお客様の外泊支援

☆取り組み

(1) 意向確認

ご家族に対し、ケアマネジャーから外泊の相談。

(2) 実施内容

○情報提供（介護方法・緊急時の対応方法など）

○介護用品の貸し出し・提供（車イスや4点杖、紙おむつなど）

○自宅⇄施設間の送迎（介護タクシーの手間と費用の軽減）

○リハビリ（外泊に向けた歩行訓練など）

☆役割分担

ケアマネジャー：ご家族との日程調整、送迎。

介護職員：情報提供表作成、荷物準備。

看護職員：薬の準備、夜間緊急時の相談。

機能訓練指導員：リハビリ。

《4. 取り組みの結果と考察》

ご本人は、暮らし慣れた家で最愛のご家族と、ひと時でもかけがえのない時間を過ごすことができました。

ご家族はどこかで親の世話をしたいという思いがあり、「外泊を通じて、その思いが実現でき、うれしかった」との言葉をいただきました。

特養に入所となっても、実現可能なものはたくさんあります。私たち職員は、皆さまのニーズをうまく引き出し、サポートしていきたいと思えます。

《5. まとめ、結論》

今回の外泊支援を通じて、あらためてご家族が特別な存在であることを感じました。

今後は、施設内の充実だけで完結せず、ご家族との距離が近い施設、入所されてもご家族も一緒になってお客様を支えているという安心感が得られる施設をつくるのが大切であると感じました。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

☆個人情報の使用について

本研究発表を行うにあたり、事前に文書にて、ご本人（ご家族）に、氏名や写真等の個人情報の使用について確認をし、了解を得ています。

《8. 提案と発信》

特養に入所すると介護保険で介護ベッドをレンタルすることができません。福祉用具の弾力的なレンタルができれば、試行などを通して、在宅復帰への支援が行いやすくなるのではないかと思います。

【メモ欄】